
烏

境 鏡介

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烏

【Nコード】

N8302D

【作者名】

境 鏡介

【あらすじ】

「殺されるかもしれない」と、友人からストーカーの相談を受けた姫路泪子。しかし、相談をしてきた友人ではなく、別の友人が殺害された。泪子は、叔父で探偵の烏山寂に協力を仰ぐが…。

プロローグ（前書き）

ミスがありましたので、一部修正しました。

ブローグ

入江理江は首を180度ひねり、背後に視線を向けた。
イリエリエ

街灯の灯りが、理江の不安げな表情を照らし出した。

理江はトートバッグの持ち手を握りしめ、ため息をついた。

「…自意識過剰かな？」

顔を正面に戻すと、理江はそう呟いて、マフラーを口元まで上げた。

11月の夜風に身を震わせて、理江は歩きだした。

理江は羽織っていた薄手のコートから折りたたみ式の携帯電話を取り出すと、ディスプレイに視線を落とした。

理江のすぐ横を、無灯火運転の自転車が風を切って通った。

理江は足を止めて、走り去る自転車の運転手の背中に目をやった。

「…危なかった。ライトくらいつけなさいよ」

と、独り文句を言うと、理江は再び歩きはじめた。

夜中の1時過ぎの住宅街には、理江以外に、家路につく人影は見られなかった。

理江はしばらくの間、ディスプレイに気をとられていたが、不意に立ち止まると、再び首をひねり、背後に視線をやった。

理江は背後を見つめながら、携帯電話を折りたたむと、コートの内ポケットに入れた。

理江は視線を自分の履いている白いスニーカーに移した。
下を向きながら、理江は歩きだした。

理江の足元では、ゴム製の靴底のギュッギュッと、音を起てていた。

理江の後方から、理江のものとは違う音が、小さく聞こえていた。
その足音は革靴を履いている人間のような音だった。

理江は足を止めた。

理江の足音が消えた。 後方の音も消えた。

理江は歩を進めた。

数秒の沈黙の後に、背後の人物も歩を進めた。

理江は足を速めた。

数秒の沈黙の後に、背後の足音の間隔が短くなった。

理江はマフラーを押さえ、息を大きく吸い込むと、走った。

バッグの持ち手を握りしめて、背後を振り返ることなく走った。

理江が息を弾ませて、自宅の玄関のドアに寄りかかったときには、革靴の音は消えていた。

代わりに、ドアの向こうからは、深夜番組に出演しているタレントの、甲高い笑い声が聞こえていた。

第1章：任せなさい

「ストーリーカー？」

と、姫路^{ヒメジ}泪子^{ルイコ}は素っ頓狂な声をあげた。

理江はキョロキョロと周りを見てから、

「泪子、声が大きい」

と、非難めいた声で言った。

泪子の通う女子大の食堂は、昼時ということもあり混み合っていた。

暖房が利いた室内には、喋り声と様々な食べ物の香りが入り混じっていた。

泪子の声に反応して、泪子達のテーブルに好奇の視線を向けたのは3、4人だった。

「本当にストーリーカーなの？勘違いじゃなくて？」

と、泪子は小声で、理江に訊いた。

「勘違いじゃないの。勘違いならよかったんだけどね」

と、理江はスパゲティの麺をフォークで巻き取りながら言った。

泪子は猫のような瞳を丸くすると、自分のピラフにスプーンを突っ込んで、

「勘違いじゃないんだ」

と、言った。

「うん。バイトが終わった後に、3日連続で！」

「3日間連続ってこと？」

「ううん。バイトがあつた日の帰りを3回つけられたってこと。

今日は金曜日だから…」

と、理江はフォークの先を見つめながら、

「今週の月曜日。水曜日。あとは昨日、ね」

と、思い出すように言った。

「…私の魅力も捨てたもんじゃないわね」

と、理江は付け加えると、ウェーブのかかったダークブラウンの髪をいじった。

「うん。でも、怖いね。心当たりはないの？」

「それは色々考えたけどね。よく分からない。…人って、『いつ』『どこで』『だれに』『どうして』『恨みや恋愛感情をもたれるか、分からないじゃない？』」

と、理江は指を折って言った。

「それはそうだけど…」

泪子はピラフを口に運びながら、

「とにかく、気をつけてね。何かあったら大変だから」

と、心配そうな表情で言った。

「…まあ、確かにね。ストーカーに怪我させられたり、殺されちゃった人だっているし。もしかしたら…」

と言葉を切って、理江は水の入ったグラスに手を伸ばした。

「…私も、殺されるかもしれないわね」

そうポツリと言って、理江はグラスを傾けた。

「やめてよ！縁起でもない」

と、泪子は不安げな表情で言った。

「でも、他人事じゃないでしょ？今朝だって、私の家の近所で殺人事件があったらしいし。…もちろん、すっごく怖いし、嫌だけだね」

と、理江はグラスを軽く揺らして言った。

泪子は、猫に似た大きな瞳で理江を見つめた。

理江は泪子の視線に気づくと、恥ずかしそうに、

「急に、黙って見つめないでよ。同性でも恥ずかしいから」と、言った。

泪子はスプーンを握りしめると、

「よし、決めた！私に任せなさい」

と、自信ありげな声で言った。

理江はキョトンとした顔をして、

「どうしたのさ。急に？」

と、泪子に訊いた。

「前に言っただと思うけど、私の叔父さんは探偵やってるの。だから、叔父さんにストーカー退治をしてもらえばいいのよ」

「なるほど」

と言ってから、理江は顔を曇らせた。

「…探偵って、ストーカー退治も業務内容にあるの？」

「無かったら、ストーカー退治も業務内容にさせるの」

と、泪子は答えた。

「依頼料、高いんじゃないの？」

「無料^{タダ}でやってくれるように頼むの」

と、泪子はケロリと答えた。

「その叔父さんで格好いいの？」

「私の叔父さんだけあって、格好いいよ」

と、泪子は目を楽しそうに細めて言った。

理江は左頬に片手を当てて、少しの間黙っていたが、

「その案、採用」

と、泪子を指差して言った。

「じゃあ、そうしよう」

と、泪子は理江を指差して言った。

泪子は、理江を指差している左手の腕時計に視線をやった。

「あ、もうこんな時間？」

「え？いま何時なの？」

と、理江に訊かれた泪子は、腕時計の文字盤を理江に見せるように手首をひねった。

理江は少し目を細めて文字盤を見つめた。

「理江。目が悪いんだから、眼鏡買ったら？」

と、泪子はため息混じりに言った。

「私は、眼鏡が似合わないの」

「じゃあ、コンタクトレンズにしたら？」

「目に物を入れるのが嫌なの」

と、文字盤から泪子に視線を移して、理江は言った。

泪子は腕を引っ込めると、大げさに肩をすくめた。

「じゃあ私、帰るね」

そう言つと、泪子は隣の席に置いていたバッグを掴んで立ち上がった。

「あ、バイトだっけ？」

と言つてから、理江は悪戯っぽく目を細めた。

「セクハラ店長に気をつけてね」

「ご忠告ありがとう。私が店長を張り倒さないように祈つててね」
そう言つと、泪子は足早に学食の出入り口に向かった。

理江は小さくなっていく泪子の後ろ姿を見つめてながら、

「…食器ぐらい片付けてから帰りなさいよ」

と、独り言をもらした。

「おはようございます！」

と、泪子はアルバイト先のコンビニエンス・ストアに駆け込むと息を弾ませて言つた。

「おはよう、姫路さん。危なかったわね。もう少しで遅刻だったわよ？」

と、レジの40代前半くらいのアルバイトの女性が笑いから言つた。

「間に合いました？よかった」

と、泪子は息を落ちつけながら、店内を見渡した。

店内では3人の客が、雑誌を立ち読みしている以外に、客の姿は無かった。

「2時からって、私と美香^{ミカ}ちゃんでしたっけ？」

と、泪子は幾分落ちついた声で訊いた。

「ああ、それだけだね…」

『手塚』（テヅカ）と書かれたネームプレートをつけた女性は声を落とすと、

「その堂本さん^{ドウモト}だけだね、殺されたらしいわよ。昨日の晩に」

「えっ？」

泪子は目を丸くして、

「本当ですか、その話？」

と、訊いた。

「本当よ。さっき警察から連絡があつたんだから。間違いないわよ」

「どうして、警察が連絡をくれたんですか？」

と、泪子は首を傾げて言った。

「堂本さんの手帳に、今日のバイトの予定が書いてあつたらしいの。だから、警察がバイトに来れない理由を伝えてくれたってワケよ」

「なるほど」

と、泪子は頷いた。

「…でも、美香ちゃんが亡くなったなんて、信じられないです。実感が湧かないな…」

「そうねえ。…とにかく、早く着替えなさい。店長がうるさいわよ」

そう言つて、手塚さんは泪子を急かした。

第2章：話してみる（前書き）

誤字、脱字がありましたので、修正しました。

第2章：話してみる

泪子が理江のストーカーの話聞いた日の翌日。

泪子は、都内S区のとある3階建てのビルの前に立っていた。

その小型のビルは大通り沿いではなく、大通りから横路を少し入ったところにあった。

1階は花屋で、木製の看板には『Ipanema』（イパネマ）と、白い文字で書かれていた。

3階には、『テナント募集』の貼り紙がしてあった。

泪子は、白いコートの内ポケットから名刺を取り出すと、名刺と目の前のビルの2階とを交互に見た。

2階には窓ガラスが4枚あり、その内3枚には、泪子から見て左から1枚ごとに、『鳥』『探』『事』と書かれていた。

泪子は、2階から『Ipanema』に視線を移した。

『Ipanema』の店先にはハーブなどの観葉植物が並び、店内は色とりどりの花々に埋め尽くされていた。

店の中では、緑色のエプロンをした20代半ばくらい女性が、手際よく切り花の水の入れ替えをしていた。

その女性羽村明日香は、泪子に気付いた様子で、

「いらつしゃい」

と、微笑みかけた。

泪子は慌てたように軽く会釈をしてから、

「…いい香りですね」

と、明日香に言った。

明日香は、カウンターに置いてあったタオルをつかむと、濡れた手を拭きながら、店先に出てきた。

「ありがとう。えつと…、どんなものをお探しかしら？」

と、明日香は泪子に訊いた。

泪子は、右手で首筋をさすりながら、

「あ、えつと…」
と、言い淀んだ。

明日香は首を傾げたが、すぐに泪子が右手の指先に挟んでいた名刺に目を止めた。

明日香は楽しそうな笑顔を泪子に見せると、

「もしかして、寂^{ジャク}さんのお客さん？」

と、2階を指差して言った。

「そんなところです」

と、泪子は答えた。

「なるほどね」

そう言つと、明日香は店の中を振り返った。

「寂さん！あなたにお客さんよ！」

と、明日香は呼びかけた。

数秒の間の後、店の奥からガタガタと物音を立てて、1人の男が姿を現した。

その長身の男は、腕まくりをした白いYシャツの上に、明日香のものと同じように店名が書かれたエプロンをしていた。

男は眩しそうに少し目を細め、驚いた顔をした泪子に視線を止めた。

「…ああ、泪子か。久しぶり」

と、男は低音のハスキーな声で言った。

しばらく、泪子は目を丸くして口をポカンと開けていたが、やがて、

「…寂叔父さん。いつからお花屋さんになったの？」

と、片手に霧吹きを持った叔父に問いかけた。

「別に花屋になったわけじゃない。持ちつ持たれつなんだよ。…」

お互いにな」

と、事務所のドアを開けた烏山カラスヤマ寂は泪子に言った。

「どういう意味？」

と、泪子は訊いた。

「明日香さんも俺も、1人で商売してる。だから、俺がいないときに依頼者が来たら、明日香さんが依頼者の連絡先を聞いておいてくれる。その代わりに、花の配達なんかは俺がやってる。…まあ、適当に座っててくれ」

と、烏山はソファを示して言った。

「でも、さつき下にいたのはどうして？」

と、泪子はコートを脱ぎながら言った。

「暇だったんでね」

そう言つと、烏山は事務所の隅の流し台に向かった。

「…紅茶かココア、どっちがいい？」

と、流し台の上の棚に手を伸ばしながら烏山は泪子に訊いた。

「やっぱり、コーヒーは無いんだ。叔父さん、コーヒー嫌いだもんね」

と、泪子は楽しそうに言った。

「まあな」

と、冷蔵庫から水の入ったペットボトルを取り出して、烏山は言った。

「じゃあ、ココア」

「…はいよ」

泪子は事務所の中をゆっくりと見回した。

出入り口のすぐ横にあるトイレ以外にはドアが無い、ワンルームだった。

泪子が座っていたソファは、部屋のほぼ中央にあり、向かい側に同じデザインのソファ、そのソファの左後方には中型のテレビがあった。

向かい合ったソファとの間には、ガラス天板のテーブルがあった。

泪子から見て左が通りに面した窓側で、窓際には、モダンなデザインデスクが置かれていた。

泪子から見て右には窓が無く、流し台や冷蔵庫といったものが置かれている、キッチンのようなスペースだった。

泪子は、正面の壁に貼ってあるマリリン・モンローのポスターを見ながら、

「叔父さんって、モンローのファンだったの？」

と、烏山に訊いた。

「…ファンってほども無いよ」

と、ガスコンロにやかんを載せて火を点けた後に、烏山は言った。

「じゃあ、どうして貼ってるのさ？」

「飾り気が無いと、殺風景だからさ」

烏山は泪子の向かい側のソファに腰を下ろすと、

「…しかし、泪子がここに来るのはいつ以来だ？」

と、姪に訊いた。

泪子は首筋をさすりながら、

「…多分、お母さんが死んじゃった時に来たのが最後だと思う。だから、9年振りだね」

と、叔父に答えた。

「…そうか。姉貴が死んじまって以来か。長いな」

「うん…」

と、泪子は視線を下に向けて言った。

「…今日は大学はどうした？休みか」

と、烏山は話題を変えるように言った。

「あつたけど、サボった」

と、烏山に視線を戻して、泪子は答えた。

「寒くないか？」

と、烏山は泪子のミニスカートを、チラッと見て訊いた。

「うん。若いから」

と、泪子は答えた。

「今日は何の用で来たんだ？」

「お願いがあつて来たの」

と、泪子は烏山に言った。

烏山は瞳を閉じて、目頭を押さえた。

「…分かった。話してみろ」

第3章：偶然かな？

「…ようするに。ストーカー対策をして欲しいワケだな？しかも、^{タダ}無料で」

と、烏山は湯気がたつカップを泪子の前に置いて、言った。
「うん」

泪子はココアのカップを口に運んだが、一口飲むと即座に、
「熱い！叔父さん、私が猫舌だって知ってるでしょ？」
と言つて、烏山に非難めいた視線を向けた。

「…知ってるよ。すぐに飲まないで、冷めるまで待て」
と、烏山は自分のカップを見つめながら言った。

泪子は、頬を膨らませて、烏山を睨みつけながら、
「それで、叔父さん。やってくれる？」

と、叔父に訊いた。

烏山は目を閉じて、目頭を押さえると、

「…俺も商売だからな。無料でやっても、何の利益も無い。断りたいところだな」

と、答えた。

「ケチ！」

「…困ったことがあったら、いつでも来い」
つて、言つてたくせに」

と、泪子は烏山の物真似をして言った。

「別に断ったわけじゃないだろう？俺は『断りたいところだ』と言つたんだ。早とちりするな」

と、烏山は目を閉じたままで言った。

「じゃあ、やってくれるの？」

「…ああ。やってやるよ」

泪子は途端に顔をほころばせて、

「ありがとう！叔父さんは約束を守る人だと思ってたよ」

と、声を弾ませて言った。

烏山は目を開けると、自分のカップに手を伸ばした。

「助かったよ。最近は物騒だから」

と、泪子は意味深な様子で言った。

「そうだな。事件の件数は増えてるだろう。空き巣、詐欺、殺人……」

烏山は口をつけずに、カップをテーブルの上に戻した。

「……そう言えば昨日、いや一昨日の晩か。隣の区で女子大生が殺されたらしいな、確か。泪子も気をつけろよ」

「うん……」

泪子はココアを息で冷ましてから、カップに口をつけた。

「……叔父さん。多分、その女子大生、私の友達」

烏山は少し驚いた様子で泪子に視線をやった。

「確かか？」

「多分。ニュースとかで確認はしてないけど……」

突然、ソファから立ち上がって、烏山は窓際のデスクに向かった。

烏山はデスクの上から新聞を取り上げると、再び泪子の向かいに腰をおろした。

烏山は新聞をめくって、視線を素早く動かした。

「……これだ。一昨日、11月8日の深夜。N区のT町に住む女子大学生。名前は堂本美香。ドウモトミカ21歳。……間違いないか？」

と、泪子に訊いた。

「……うん。間違いない」

と言って、泪子はココアをすすった。

「そうか」

そう言って、烏山はカップに手を伸ばした。

すでに膜が張ったココアを一口飲むと、烏山は弾かれたように力
ツプから口を離した。

「……まだ、熱いな」

そう呟いて、烏山はカップをテーブルに置いた。

「じゃあ、理江に来るように伝えるから！明日でいいの？」

階段を降りきると、泪子は元気そうに言った。

太陽が沈みはじめ、夕陽が『Ip an e m a』の花々をオレンジ色に染め上げていた。

「ああ。…気をつけて帰れよ」

と、烏山は眩しそうに目を細めて言った。

「分かってるよ」

そう言っただけで泪子は手を振ると、烏山に背を向けた。

烏山は小さくなっていく泪子の背中を無言で見送った。

『Ip an e m a』の店先に立っていた烏山に、明日香は店の中から出てきて声をかけた。

「随分と仲がいいのね。知り合い？それとも、隠し子か何か？」

「…隠し子じゃない。姪っ子。姉貴の忘れ形見だ」

烏山は、黒いスーツの上着の内側から皮製の小物入れを取り出して、答えた。

明日香は、ふうんと言ってから、

「可愛い娘じゃない。例えるなら…。そうね、猫みたいな」

と、烏山に言った。

烏山は小物入れから棒つきのキャンディを取り出すと、包みを開けながら、

「…猫か。確かに。でも、猫背ではないな」

と、応じた。

「手、出しちゃ駄目よ」

「分かってるよ」

そう言っただけで、烏山はキャンディを見つめた。

「俺はヒトラーになるつもりらしい…」

明日香は横目で烏山を見ながら、
「…ヒトラーになるつもりは無い、って言いたかったの？」
と、尋ねた。

烏山は明日香の問いに答えずに、無言でキャンディを口に含んだ。

翌日。

烏山探偵事務所には3人の男女がいた。

探偵の烏山寂。

依頼者の入江理江。

「…どうして泪子も来てるんだ？」

と、烏山は泪子を見て言った。

「私？私は理江の付き添い」

と、泪子は澄まして言った。

烏山はソファから立ち上がると、流し台に向かった。

「理江、紅茶かココア。どっちがいい？」

と、泪子は理江に訊いた。

「ココア？コーヒーじゃなくて？」

と、理江は泪子に聞き返した。

「うん。ココア」

「えっと…。じゃあ、ココア」

と、少し悩んだ様子で理江は答えた。

「分かった。叔父さん、ココア2つ！」

と、泪子は烏山に注文した。

烏山はペットボトルの水をやかんに移しながら、

「…はいよ」

と、応えた。

理江は、烏山がガスコンロをいじっている姿を目を細めて眺めな

がら、

「…なかなか格好いいじゃない。背も高いしさ。何歳なの？」
と、泪子に耳打ちした。

「…確か、まだ35歳よ」

と、泪子も理江に耳打ちした。

「…35か。ギリギリ守備範囲内ね」

と、理江は呟いた。

烏山はコンロに火をつけると、ソファに戻った。

「…入江さん。大体の被害の内容は、昨日泪子から聞きました。
聞いたところ、何者かにつけられていらっしやるようですね？」

「はい」

「何か物が送られてきたり、逆に物が無くなったりはしていませんか？」

理江は膝の上のハンドバッグを見つめながら、

「…無いですね。つけられているだけだと思います」
と、答えた。

「それも、アルバイトのある日のみ？」

「はい。まだ3回ですが」

「アルバイトは何を？」

「ファミリーストランのホールスタッフです」

「始められて何ヶ月ですか？」

「…2ヶ月くらいですかね」

「…なるほど」

そう言うってから、烏山は泪子をチラッと見た。

泪子は、真剣そうな面持ちで、やかんを見つめていた。

烏山は理江に視線を戻してから、

「…それでは入江さん。住所と連絡先を教えてくださいませんか？」

と言つて、上着から手帳を取り出した。

「はい。…住所はN区T町の3丁目で、番地が…」

「N区T町!？」

突然、泪子が理江の言葉を遮った。

「びつくりした…。どうしたの？いきなり…」

と、目を丸くして理江は泪子に訊いた。

「理江、理江の家の近所で殺人事件があったって、この間言ってたよね？」

と、泪子は早口で理江に訊いた。

「えっ？う、うん」

と、理江は呆気にとられた表情で答えた。

「叔父さん！」

「…分かつてる。大声を出すな」

烏山は目を瞑り、目頭を押さえた。

「…偶然かな？」

と、泪子は独り言のように呟いた。

第4章：ついて来い

月曜日。

烏山は、理江がアルバイトをしているファミリーレストランにいた。

烏山は食べ終わった皿をテーブルの端に寄せて、アイス・ミルクティーを飲んでいた。

烏山が客のまばらな店内を何気なさそうに見回していると、レストランのドアが開き、新たな客が店内に足を踏み入れた。

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

と、レジの店員が良く通る声で客を迎えた。

烏山は、店員の声につられたようにレジに視線をやった。

新しい客は店員の問いに答えずに、店の中を見回した。

その客は烏山と視線が合うと、烏山のテーブルに近づいた。

「お待ちせ！」

と、元気な声で言って、泪子は椅子に座った。

烏山はグラスをテーブルに置くと、

「俺は、誰とも待ち合わせをした覚えはないが…。何をしに来た？」

と、メニューに手を伸ばした泪子に訊いた。

「なによ、その失礼な言い方。せつかくおもりにきてあげたのにさ」

と、泪子は口を尖らせて言った。

「…おもりか」

「うん。だって、叔父さん独りじゃ心配だから」

と、メニューに視線を走らせて泪子は言った。

先ほどレジにいた店員が水とおしほりを運んできて、泪子の前に置いた。

「ご注文がお決まりになりましたら、お呼びください」

店員がテーブルを離れると、烏山は泪子に、

「…ここを教えたのは明日香さんか？」
と、訊いた。

「うん。すぐ教えてくれたよ」

と、泪子はメニューに視線を落としたままで答えた。

「…ねえ、叔父さん。時期に合わせてモンブランがいいかな？それとも、時期なんて関係ないチョコレートパフェがいいかな？」

「これからどうするの？」

店を出ると、泪子は烏山に訊いた。

「…入江理江のここからの帰宅ルートの確認。比較的、人目につかない場所を探す」

と、薄手のコートを羽織りながら烏山は言った。

「張り込みの場所取りってことね？」
と、泪子は訊いた。

「まあ、そんなところだ」

そう言つと、烏山は泪子を見た。

「…あまり邪魔するんじゃないろ？」

泪子は烏山を見つめ返した。

「…もしかして、邪魔するんじゃないぞ、って言いたかったの？」
烏山は泪子から目を逸らすと、先に立って歩きだした。

暖かい日であつたが、時折、冷たい風が吹き付けた。

「ねえ、叔父さん。早口言葉の練習でもしたほうがいいよ」

と、烏山に追いつきながら泪子は言った。

「それと、歩く速度が速い！歩幅、考えてよ」

烏山はゆっくりとした速度に落しながら、上着から小物入れを取り出した。

「…早口言葉か。例えば？」

「そうだな…。『生麦生米生卵』とかは？」

すらすらと言って、泪子は烏山に提案した。

烏山は小物入れから棒つきのキャンディをつまみ出すと、小物入れをポケットに戻した。

烏山は一度深呼吸をした。

「…なまみつ」

「生身？」

と、泪子は烏山に聞き返した。

烏山はキャンディの包装を取ると、キャンディを口に運んだ。

「…失敗だ」

と、烏山は口にキャンディを入れたままで呟いた。

「…うん。分かった」

と、正面を見据えて泪子は言った。

烏山と泪子はレストランやコンビニエンス・ストア等が軒を連ねる賑やかな通りから外れ、住宅街へとつながる横路に入った。

「ねえ、叔父さん。こんな所に隠れる場所なんてあるの？」

と、左右をキョロキョロと見渡して泪子は訊いた。

「…公園や神社でもあれば楽なんだがな」

「こんな住宅街に神社なんてあるかな？」

泪子は、烏山の口からはみ出している白い棒を見つめて、訊いた。

「意外とな。あるんだよ。しかし残念だが、地図で確認した限りだと、この近所には見つからなかった」

と、烏山は言った。

「じゃあ、公園は？」

烏山は数秒の沈黙の後、

「…少しルートから離れた所にある」

と、答えた。

「張り込みには使えない？」

「…ああ。使えない」

「残念」

と、泪子はつまらなそうに相づちを打った。

「…大体10分つてところか」

と、無骨なデザインの腕時計を見ながら烏山は言った。

「どこか、いい隠れ場所あった？」

と、理江の家の塀に寄りかかつて、泪子は訊いた。

「空き家があった。ここからだ…。大体4分くらいか」

「本当に空き家？」

と、泪子は疑わしそくに目を細めて言った。

「『For Rent』の看板が出ていた。気づかなかったか？」

「気づかなかった」

「そうか」

そう言つと、烏山は口からキャンディの棒を引き抜いた。

キャンディはすでに無くなつていた。

泪子は、コートのポケットに両手をつっ込んで、向かいの家のインターホンを見つめていた。

「…ねえ、叔父さん」

と、沈黙を破つて、泪子が言った。

「…何だ？」

と、烏山は答えた。

「美香ちゃんが亡くなつたのつて、この近所なんだよね？」

視線を動かさずに泪子は訊いた。

烏山は無言で、泪子に視線をやった。

「その場所つて、分かる？」

「…知りたいのか？」

「知りたい」

烏山はしゃがみ込んで、排水溝の蓋の隙間にキャンディの棒を捨てた。

烏山はゆっくり立ち上がると、

「…分かった。ついて来い」

そう言つて、来た道を戻つていった。

色あせた『For Rent』の看板が掲げられた空き家のある角を、烏山達は左に曲がつた。

「…さっきの角にあつた空き家だ」
と、烏山は泪子に言つた。

「見張りに使うところ？」
と、泪子は烏山に聞き返した。

「あくまでも候補だ」
似通つた建て売り住宅の続く通りを進み、烏山達は突き当たりの丁字路を右に曲がつた。

その先では、家々の間にマンションやアパートが少しずつ見えはじめていた。

通りの左側に小さく、こじんまりとした公園があつた。

植え込み、花壇、ブランコ、砂場、公衆トイレくらいしか見当たらない公園に入ると、泪子は、

「……ここ？」

と、烏山に訊いた。

「…正確には、そこ」

烏山は視線をブランコに移した。

黄色く塗られたブランコの足場には、花や菓子等の供え物があつた。

「あそこ？」

「そこ」

泪子はゆっくりとブランコに近づくと、ブランコの鉄骨を軽く叩いた。

烏山はブランコには近づかずに、生気の失せた花壇の花々を見下

ろした。

泪子はしゃがみ込むと、静かに両手を合わせた。風が吹いて、泪子の栗色の髪を揺らした。

長い祈りの後に、泪子は立ち上がると、

「ねえ、叔父さん。今日から張り込み？」

と、烏山に訊いた。

「ああ」

と、烏山は答えた。

「理江のストーカー、絶対捕まえてよ」

と、コートの前を合わせながら泪子は言った。

「…ああ」

そう応えて、烏山は身震いをした。

第5章：逃がしたの

「お葬式、ですか？」

と泪子は、アルバイト先の事務室で、店長のカシノヒデオ榎野秀夫に訊いた。

「そう。堂本ちゃんのね」

と、榎野は薄くなった頭を掻きながら言った。

「本当は行く必要は無いんだけどね。でも、事情が事情だし…。バイト先の代表って感じでさ、行ってくれないかな？」

コンビニエンス・ストアの制服を着た泪子は、首筋をさすって、視線を泳がせた。

「…いいですよ。いつですか？」

と、泪子は訊いた。

「明日の11時から。場所は…」

そう言って、榎野はパソコンと、山積みの書類に埋もれている事務机をあさって、1枚のプリントを取り出した。

「えっと…、場所はここ。地図も書いてあるから確認して」

と言って、榎野は泪子にプリントを渡した。

「葬祭場ですか…。N区ですね」

と、プリントを受け取って、目を通しながら泪子は言った。

「そう。多分都内で火葬しちゃって、お骨だけ故郷に持って帰るんじゃないかな」

と言いいながら、榎野はぜい肉のついた腹を搔くと、椅子から立ち上がった。

「じゃ、よろしく。お疲れ様」

ヤニくさい手で泪子の肩を叩くと、榎野は事務室から出ていった。榎野が出ていくと、泪子は榎野に叩かれた肩に視線をやった。

泪子は、猫のように大きな瞳を不快そうに細めた。

泪子は大きな身震いをしてから、更衣室のアコーデオン・カーテンを勢い良く開いた。

「捕まえられなかった？それじゃあ、逃がしたの？」

と、泪子は烏山を咎めるような声の調子で言った。

烏山は、烏山探偵事務所のソファに横たわって、目頭を押さえていた。

事務所はブラインド・カーテンが閉められ、蛍光灯の明かりが部屋に満ちていた。

「…早とちりするな。逃がしたのとは違う。第一、昨日は出なかった」

と、目を閉じたままで烏山は言った。

「どうして、そう言い切れるのさ？」

と泪子は、烏山を見下ろしながら訊いた。

「…入江さんをつけたのがストーカーではなく、俺だったからさ」と、烏山は言った。

「つけた？張り込みじゃなかったの？」

と、泪子は訊いた。

「…色々とな。段階があるんだよ」

「なによ。いい加減なことばかり言ってさ」

と、泪子は肩をすくめて言った。

「…加減は大事だぞ」

そう言うつと、烏山は起き上がった。

烏山はソファに座り直し、緩めていたダークブルーのネクタイを締め直した。

「叔父さん、明日って暇？」

と、烏山の前に立ったままで、泪子は訊いた。

「…そんなこと訊いてどうする？」

と、捲っていたYシャツの袖を直しながら、烏山は訊いた。

「もちろん、暇なら利用する」

と言って、泪子は肩に下げていたバッグから、一枚のプリントを引っぱり出すと、烏山の目の前に突き出した。

「…葬祭場、か？」

と、視線をプリントに走らせて、烏山は訊いた。

「そう。ここで、美香ちゃんのお葬式があるの。連れて行ってくれない？」

と、泪子は軽く首を傾げて言った。

烏山は何も言わずに立ち上がると、流し台の方向に向かった。

烏山は冷蔵庫のドアを開けて、水の入ったペットボトルを取り出した。

「ねえ、叔父さん。連れて行ってくれないかな？」

と、泪子は烏山に近づいて言った。

烏山は備え付けの小さな食器棚からグラスを取り出して、水を注いだ。

グラスの水を一口に飲み干すと、烏山は泪子を見た。

「…独りじゃ行けないのか？」

「独りじゃ寂しいじゃない」

と、泪子は烏山を見上げて言った。

「明治さんアキハルに連れて行ってもらえないのか？」

「明日の１１時だよ？その時間は、お父さんは講義の真っ最中」

「泪子も学校じゃないのか？」

「もちろん、サボる」

と、泪子はきつぱりとした口調で言った。

烏山はグラスをシンクに置くと、

「…分かった。連れて行ってやる」

と、ため息混じりに言った。

「ありがとう！お礼にケーキでも奢るね」

と、泪子は嬉しそうに言った。

烏山は欠伸をしてから、

「…だったら、クレープにしてくれ」と、言った。

翌日の水曜日。

泪子達はN区にある『ギフト葬祭場』にいた。

堂本美香の遺影が掲げられた祭壇の前では、僧侶が単調に念仏を唱えていた。

「人、少ないね。平日だからかな？」

と、泪子は隣の烏山に耳打ちした。

何列にも並んだパイプ椅子には空席が多く、広い室内を、より広く見せていた。

「…ああ。それに、故郷じゃないのも関係してるだろう」

と、烏山は泪子の耳元に口を寄せて言った。

「うん。ほとんどが親族だね。…残りのあのグループは、大学の友達かな？」

そう言っ、泪子は視線を右斜め前に動かした。

室内は、中央の祭壇へと続く通路によって、左側と右側に分かれていた。

泪子達は、左側の最後尾から3列目に陣取っていた。

泪子が示したグループは、右側に座っていた。

若い男が2人、若い女が3人のグループだった。

全員、黒いスーツを着てはいるが、髪の毛が黒い者はいなかった。

「…だろうな。それに、俺達の後ろ。男が2人いるだろう。…あいつらは警察だ」

「嘘」

そう言っ、泪子は後ろをチラリと見やった。

グレーのスーツを着た大柄な若い男と、焦げ茶色のスーツを着た

初老の男が最後尾の席に座っていた。

「本当？」

と、顔を前に戻して泪子は言った。

「ああ。年寄りの方は知り合いだ」

と、烏山は言った。

葬祭場の職員が最前列の人々を誘導し、お焼香が始まった。

式が終わり、外に出ると、泪子は先ほどのグループに近づいていた。
った。

烏山は、青いミニクーパーに寄りかかり、喫煙所に固まっていたグループと泪子が話している様子を眺めていた。

「…おい。もしかして、烏か？」

烏山は声のした方向を振り返った。

「…どうも。ご無沙汰してます。渋川^{シブカワ}さん」

と、烏山は渋川警部補に挨拶した。

白髪だらけの髪を搔くと、渋川は大きな欠伸をした。

「…悪いな。最近、寝てないからよ。どうして、ここにいる？」

「姪の付き添いです。友達だったらしく」

「ようするに、運んできたのか。…そんなに暇じゃ、景気はよくなさそうだな？」

「相方はどうしました？」

と、烏山は渋川の問いに答えずに、スーツの内側を探りながら言った。

「親族と話させてる。まあ、捜査の状況とかをな」

「…進んですか？」

「そうでもないな」

渋川は頭を搔きながら、

「財布は手付かずだったから、物取りの線は薄い。だとすると、怨恨だとは思うんだがな……」

と、曖昧に言葉を切った。

烏山は小物入れからキャンディを取り出すと、包みを剥がした。

「……怨恨の線も薄いんですか？」

「交友関係も洗ったら、本人は大層真面目だったそうだ。他人に恨まれるようなこともしてない、とさ」

そう言ってから、渋川は煙の立ち上る喫煙所を見つめた。

「……まあ、あくまでも、本人は、だけどな」

葬祭場の出入り口の自動ドアが開き、先ほどのもう1人の刑事が小走りで出てきた。

渋川はそれを見てとると、

「……もし、姪っ子から害者の情報貰ったら連絡くれ」

そう言って、渋川は烏山に背を向けた。

渋川は若い刑事と合流すると、駐車場の隅の黒い車に向かった。

渋川は不意に立ち止まると、振り返って、

「……烏。姪っ子ってのは、お前の姉貴の娘か？」

と、訊いた。

烏山は渋川を見ずに、キャンディの棒を口で上下に動かした。

渋川は烏山を見つめていたが、大きな欠伸をすると、車に向かった。

渋川達が乗り込み、ドアが閉まると、黒い車は排気ガスを吹き上げて、烏山の目の前を通り過ぎた。

烏山は排気ガスに顔をしかめてから、ミニクーパーに乗り込んで、シートのリクライニングを軽く倒した。

第6章：もんろっ…

「やっぱり、あの人は大学の友達だつて。同じサークルらしいよ」

と、式場から帰る車の中で泪子は言った。

「…そうか」

と、烏山は正面を見据えて言った。

「軽音楽だつて。美香ちゃんは今、オーカルをやってたらしいよ」
「本人からは聞いてなかったのか？」

と、烏山は泪子に訊いた。

「聞いてたかもしれないけど、忘れてた」

と、泪子は流れていく街の景色を見ながら言った。

昼時ということもあり、歩道は往来が激く、なかには行列の出来た定食屋やラーメン屋もあった。

泪子は無言で、首筋に手を当てていた。

烏山は無言でハンドルを操っていた。

「…叔父さん。刑事さんと話してたよね？美香ちゃんの事件のこと、何か分かった？」

と、泪子は烏山に訊いた。

信号機が赤を示したので、烏山はブレーキを踏んだ。

ミニクーパーは静かに停車した。

「…あまり、進展はしていないらしい」

と、烏山は口からキャンディの棒を抜いて言った。

「そう」

「今は被害者の交友関係を洗ってるらしい。…もしかしたら、泪子の話も聞きにくるかもな」

と、烏山は車の灰皿に棒を押し込みながら言った。

「そう」

と、泪子は応えた。

車内は再び沈黙に包まれた。

信号機が青く点灯し、青いミニクーパーは走り出した。

「…ねえ、叔父さん」

と、泪子は烏山に語りかけた。

「何だ」

烏山は泪子をチラリと見やった。

黒いスーツ姿の泪子は、ガラスに頭を預けていた。

「…美香ちゃんね。死んじゃったんだよ」

と、泪子は言った。

「ああ」

と、烏山は応えた。

「もう会えないんだよ。二度と会えない」

「そうだな」

と、烏山は言った。

「そうなんだ」

と、泪子は語尾を震わせて言った。

泪子は両手で顔を覆うと、前かがみになった。

「…いなくなっちゃった」

と、泪子は震える声で言った。

泪子のしゃくりあげる音、鼻をすする音が車内に満ちた。

烏山は左手をドアポケットに突っ込むと、ポケットティッシュを取り出した。

ティッシュを右手に持ち替えると、烏山はティッシュを泪子の膝の上に置いた。

泪子は片手でティッシュを無造作にむしりとると、顔に押し当てた。

「…ありがとう」

と、泪子はティッシュの下でもごもごと言うと、再びしゃくりあげはじめた。

烏山は右手でオーディオをいじった。

オーディオのガチャガチャとした起動音の後に、スピーカーからピアノとウッドベースの音色が流れはじめた。

「お待たせ！」

目の前のファーストフード店から帰ってきた泪子は、元気よく言った。

烏山はオーディオをいじって、音楽を止めた。

「ねえ、シェーキだけどバニラとストロベリー、どっちがいい？」

と、泪子は紙袋をあさりながら訊いた。

泪子の抱えた紙袋からは、ファーストフード独特の匂いが漂っていた。

「どっちでもいいが…。それより、チョコレートサンデーはどうした？」

ファーストフードの紙袋をあさる手を止めて、泪子は思い出したように、

「あ。忘れてた」

と、言った。

烏山は目を閉じて目頭を押さえた。

「ごめん！好きな選んでいいから」

そう言って、泪子は烏山の目の前で紙袋を開いた。

「…その前に移動するか。このままだと営業妨害だからな」

烏山はそう言って、ファーストフード店の前から車を発進させた。

「…怒ってる？」

と、泪子は紙コップにストローをさしながら訊いた。

「怒ってる」

と、烏山は言った。

泪子は、うなだれたようにストローをくわえた。

「…嘘だ」

と、烏山は言った。

「嘘か！」

と、泪子は目を丸くして言った。

「次は忘れないでくれ。…何かくれないか」

と、烏山は右手を泪子に差し出しながら言った。

泪子は烏山にハンバーガーを渡すと、

「叔父さん、今晚は張り込みでしょ？」

と、訊いた。

「…ああ」

齒をつかってハンバーガーの包みを取りながら、烏山は答えた。

「私も行っていい？」

「駄目だ」

と、烏山は即答した。

「何でさ？」

と、泪子は頬を膨らませて言った。

「…無料働きでも、仕事は仕事だ。泪子、お前は素人だ。首を突

っ込ませるワケにはいかない」

と、ハンバーガーを頬ばりながら烏山は言った。

「でも、私は依頼人だよ？見届ける権利があるんじゃない？」

と、泪子は烏山の口元についたケチャップを見つめながら言った。

烏山はハンバーガーにかじりついてから、

「依頼人は泪子じゃない。入江理江さんだ。…泪子はあくまでも

仲介者みたいなもんろっ…」

突然、烏山は言葉を途切って、食べかけのハンバーガーを泪子に

渡した。

「叔父さん、どうしたの？」

烏山は苦しそうな表情をして、右手をウロウロと動かした。

「もしかして、喉に詰まった？」

烏山は、泪子の問いかけに対して、大きく頷いた。

泪子は紙袋を覗きこみながら、

「どうしよう。シェーキしかないや…」

と、呟いた。

「シェーキでもいい？」

と、泪子は自分の飲みかけのシェーキを烏山に渡した。

烏山はシェーキを受け取ると、ストローをくわえて、中身を勢いよく吸い込んだ。

泪子は窓の外に視線を走らせた。

「…あつ！叔父さん、コンビニがあるよ。200mくらい先に！
そこまで耐えて！」

烏山は顔を真っ赤にしながら、アクセルを強く踏み込んだ。

泪子は雑誌をめくる手を休めて、腕時計に視線をやった。

時計の針は深夜1時を指し示していた。

泪子はコンビニエンス・ストアにいた。

通りを挟んだ向かい側には理江の働いているファミリーストランがあった。

「…そろそろかな」

と、独り言を言つて、泪子は窓越しにファミリーストランを見た。

ファミリーストランには駐車場は無かった。

泪子は視線を右に動かした。

すぐ近くには駅があった。

駅から出てくる人影は無かった。

泪子は雑誌を棚に戻すと、店の外に出た。

夜風が、赤いキャスケット帽を被った泪子の髪を揺らした。

泪子は身震いをする、黒いジャンパーのジッパーを閉めた。

泪子はキャスケット帽を被り直し、両手をジャンパーのポケットに突っ込んだ。

「…行きますか」

と、泪子は呟いた。

泪子は猫のような瞳をファミリーレストランに向けて、ゆっくりと歩きはじめた。

第7章：怒ってる？

色あせた『For Rent』の看板が掲げられた空き家の前で、理江は立ち止まった。

理江は背後に視線を向けた。

街灯の灯りが、理江の不安げな表情を照らし出した。

「…ちゃんと仕事してるんでしょうね？」

顔を正面に戻すと、理江はそう呟いて、マフラーを口元まで上げた。

理江は羽織っていた薄手のコートから折りたたみ式の携帯電話を取り出すと、ディスプレイに視線を落とした。

「…危なかった」

泪子は自動販売機の陰に隠れて、ため息をついた。

泪子はキャスケット帽を目深に被り直すと、自動販売機の陰から顔を覗かせた。

泪子が隠れている自動販売機から25m程離れたところで、理江は立ち止まっていた。

「…なんで歩かないのさ。もしかして、気づかれたかな…」

と、理江の様子を見ながら泪子は呟いた。

泪子が独り言を言い終わると同時に、泪子のジャンパーのポケットが震え出した。

泪子は慌てた様子でポケットに手をつ突っ込むと、バイブレータで震えている携帯電話を取り出した。

「…もしもし」

と、泪子は声をひそめて言った。

「もしもし？今、電話で話しても大丈夫？」

と、電話のスピーカーから理江の声が尋ねた。

泪子は周囲をキョロキョロと見回した。
人影は見あたらなかった。

「…多分、大丈夫」

と、泪子は答えた。

「多分？」

と、理江は不意をつかれたような声で返した。

「…まあ、いいじゃない。ところで、どんな用？」

と、泪子は理江の後ろ姿を見ながら訊いた。

「ストーカーの話だけど…。順調なの？」

と、理江は歩き出しながら訊いた。

「順調って？」

そう言って、泪子はしゃがみ込んだ。

「仕事の進み具合。犯人の手がかりとか見つかったの？」

と、理江は訊いた。

「さあ…。叔父さんに任せてるから、私には分からないよ」

と、泪子は理江の後ろ姿を視線で追いながら言った。

理江はふうんと言ってから、

「真面目にやってるの？ なんだか、変な感じがするんだけど」

と、理江は頭を掻きながら言った。

「変な感じって？」

と、泪子は訊いた。

「うーん…。よく分からないけど、視線みたいなのを感じるの。」

今も…」

そう言って、理江は後ろを振り返った。

泪子は慌てた様子で顔を引っ込めた。

「…感じるの。なんだか気味悪くて」

と言って、理江は顔を正面に戻した。

「大丈夫。それは問題ないよ」

と、泪子は自動販売機の下を覗きながら言った。

「『それは』？」

と、理江は訊いた。

「なんていうかね…。今のところ大丈夫だよ」

と、自動販売機の下に手を伸ばしながら言った。

「『今のところ』?」

と、理江は尋ねた。

「とにかく、心配しないで。叔父さんに任せなさい」

と、泪子は自動販売機の下から手を引っ込めて言った。

「…分かった。任せるわ」

と、理江は穏やかな声で言った。

「よし。…じゃ、早く帰って寝なさい」

と、泪子は手をジーンズで拭きながら言った。

「分かりました。じゃ、お休み」

「お休み」

と言つて、泪子は携帯電話を切った。

「…勘がいいなあ。理江は」

と、泪子は携帯電話を睨みつけて、呟いた。

泪子は立ち上がると、大きく伸びをした。

「今日は出ないかな?」

と言つて、泪子は欠伸をした。

不意に、泪子の背後から革靴の音が響いた。

泪子は、驚いたように目を見開いた。

泪子は再び、自動販売機の陰から顔を覗かせた。

革靴の音の主は、泪子の15m程先の曲がり角から姿を現した。

スーツ姿の男は、理江の歩いていった方向に向けてゆっくりと歩き

始めた。

泪子は首筋を撫でながら、男の動きを視線で追った。

「…あの人?」

と、泪子は呟いた。

泪子は携帯電話を開いて、いくつかのボタンを押した。

『烏山寂』と、画面に表示されたところで、泪子は指を止めた。

泪子は、通話ボタンを指先で軽く撫でた。

泪子は眉をひそめると、携帯電話を折り畳んだ。

泪子は視線を男に戻した。

男の後ろ姿はすでに小さくなっていた。

泪子は大きく深呼吸をすると、自動販売機の陰から出た。

男の後ろ姿を睨みつけながら、泪子は歩き出した。

理江の家の前で男は立ち止まった。

泪子は電柱の陰に隠れて、その様子を観察していた。

理江の家は2階建てだった。

2階はカーテンが閉められ、明かりもついていなかった。

男は頭をウロウロと動かしていたが、やがて諦めたように来た道を戻ってきた。

泪子は、男が泪子の隠れている電柱に近づくと、陰から飛び出した。

男は不意をつかれたように、立ち止まった。

「大人しくしなさい。ストーカーさん？」

と、泪子は悪戯っぽく微笑みながら言った。

男は持っていた鞆を泪子に投げつけた。

鞆は泪子の顔面にクリーン・ヒットした。

「うぶっ?!」

泪子は片手で顔を押さえた。

男は泪子の様子を見ると、脱兎の如く逆走した。

「……くそっ」

泪子は足元に落ちた鞆を蹴飛ばすと、走り出した。

男は、泪子を振り返らずに走った。

泪子は、片手で帽子を押さえて走った。

「待てええ！」

と、泪子は息を切らせて叫んだ。

その直後、泪子を大きな影が追い越した。

その影は泪子を引き離すと、男との差をあっさりつつめた。

男は背後を振り返り、追跡者を確認した。

影は長い腕を男の肩に伸ばすと、一気に引き倒した。

「うひゃあつ！」

男は情けない声をあげて、地面に倒れた。

泪子はスピードを徐々に落としながら、男に近づいた。

電球が切れかかった街灯の下に男は倒れていた。

倒れた男の傍には、黒いスーツを着た長身痩躯の男が立っていた。

黒いスーツの男は大きく息を吐き出すと、内ポケットに片手を突

っ込んだ。

「…叔父さん」

と、泪子は息を弾ませて言った。

烏山は小物入れを覗くと、眉をひそめた。

烏山は小物入れをポケットに戻した。

烏山は泪子を見た。

「…来るな、と言っただろう」

と、烏山は言った。

泪子は片手で首筋を撫でた。

「えつと…。確かに、駄目って言われたけど」

烏山は倒れた男を立ち上げらせると、腕を捻り上げた。

男は悲痛な声をあげた。

烏山は男の腕を捻り上げたまま、歩き始めた。

泪子は烏山から少し離れてついて行った。

「…怒ってる？」

と、泪子は鼻を撫でながら烏山に訊いた。

烏山は答えなかった。

第8章：開けてみる（前書き）

誤字がありましたので、訂正しました。

第8章：開けてみる

烏山はICレコーダーの録音ボタンを押すと、ダッシュボードの上に置いた。

「…名前と、年齢は？」

と、烏山は男の免許証を眺めながら訊いた。

「ヒロキ ヒロコキ 広木広之。26歳」

と、理江をつけていた男は、疲れた様子で答えた。

広木は乱れた黒い髪を直す様子も無く、背中を丸くして、助手席に座っていた。

「広木さん。これから、あなたにいくつかの質問をします。正直に、簡潔に答えてください」

小さなタイムパーキングに停められた烏山の車の中には3人の人間がいた。

運転席には烏山。

助手席には広木。

後部座席には、泪子が座っていた。

泪子は鼻を気にしている様子で、鼻を触っていた。

「あなたが入江さんをつけ回した理由は？」

広木は、足元に視線を落とした。

「…ただの一目惚れです」

と、広木は答えた。

「一目惚れ？」

と、烏山はドアポケットをあさりながら言った。

「…レストランで彼女が働いていて…。好みのタイプだったので」と、両手を開いたり閉じたりしながら、広木は言った。

烏山は、ドアポケットから棒つきのキャンディを3個取り出した。ドアガラスから入ってくる街灯の明かりが、キャンディ包みの色を示した。

烏山は、赤い包みのキャンディを残し、余りをドアポケットに戻した。

「…彼女が、日に日に仕事に慣れていく様子を見てたら…。なんだか、嬉しくなったりして」

と、広木はぼつりぼつりと続けた。

烏山は黙ってキャンディの包みを取った。

泪子は帽子を脱いで、手櫛で髪を直した。

「それで、先週…。家に帰る途中で、偶然、彼女を見つけて…。悪い事だとは分かっていたんですけど、つい…」

「…なるほど」

と、烏山は広木の言葉に相づちを打った。

「では、入江さんに個人的な恨みがあるわけではないのですね？」

「そんなこと、あるわけがないじゃないですか！」と、広木は顔を上げて、声を上げた。

「レストラン以外で見たのも、この間が初めてです！学校で一緒だったこともないし、第一、僕は彼女の名前も知らないですよ！」

烏山はキャンディを含んだまま、

「…信用しておきます。が、念のため連絡先と住所、勤め先は伺っておきます。…それからは、依頼者の裁量に任せます」

と、烏山は免許証をいじって、言った。

「…はい」

と言つて、広木は足元に置いていたカバンをあさった。

「話は変わりますが…、広木さん。あなた、煙草は吸いますか？」

と、烏山は訊いた。

「煙草ですか？」

手を止めて、広木は聞き返した。

「煙草は吸いません。嫌煙家ですから」

烏山は目を閉じて、目頭を押さえた。

「…そうですね。では、レストランから入江さんの家に至るまでの道に…、空き家があるのを知っていますか？」

「空き家ですか？」

「はい。白い2階建ての建物で…、ブロックの塀があるのですが、
広木は少し考えた様子だったが、

「…もしかして、あの角の家ですか？確か、看板がぶら下がって
いたかな…」

と、頭を掻きながら言った。

「そうですね」

「知ってはいますけど、入ったことはないですね」
「なるほど」

と言つて、烏山は目を開けた。

「…ありがとうございます。では、後ほど連絡しますので…」
そう言つて、烏山はICレコーダーに手を伸ばした。

車が住宅街を抜け、大通りに出ると、泪子はおずおずと口を開い
た。

「…叔父さん。どうして、あんなこと訊いたの？」

烏山はキャンディの棒を動かしながら、

「…あんなこと？」

と、助手席に座った泪子に聞き返した。

「ほら、煙草とか、空き家とか…」

烏山は、片手で上着の内ポケットを探って革製の小物入れを取り
出すと、泪子に渡した。

「開けてみる」

泪子是小物入れを開けて、中を覗き込んだ。

泪子の中身をつまみ出した。

「何、これ？」

泪子は小さな透明のビニール袋を手になしていた。

ビニール袋の中には、同じ銘柄の煙草の吸い殻が2本入っていた。
「空き家の庭で見つけた。ちょうど、塀に隙間がある辺りだ。…
道が見張れる位置だな」

と、烏山はハンドルを操りながら言った。

「…まだ新しいね」

と、泪子はドアガラスにビニールをかざしながら、言った。

「…もしかしたら、と思っただけ」

と、烏山は言った。

泪子はふうん、と言ってビニール袋を眺めた。

泪子はしばらくビニール袋を眺めていたが、突然顔色を変えて、

「もしかして！」

と、大声を出した。

烏山は驚いた様子で、ハンドルを操った。

ミニクーパーは10m程蛇行した。

「叔父さん！もしかしたら、これ、美香ちゃんの事件の犯人の物
かもしれない！」

と、泪子は勢い込んで言った。

「道が見張れる位置だったんでしょ？あの空き家って、公園の方
に行く道にも面してたよね？」

烏山はキャンディの棒を引き抜くと、

「…そうだな」

と、答えた。

「つまり」

と、言葉を切って、泪子は首筋を撫でた。

「駅の方から来る美香ちゃんを、犯人は空き家の庭で待っていた。
美香ちゃんが来たことを確認すると、犯人は美香ちゃんを尾行
した」

と、泪子は続けた。

烏山はキャンディの無くなった棒をくわえた。

「そして、途中で尾行に気がついた美香ちゃんは公園に逃げ込ん

だ。そして、そこで……」

と言つて、泪子はため息をついた。
赤信号で、車は停車した。

「……可能性としては、あり得る」

と、烏山は言つた。

泪子は烏山を見た。

烏山はネクタイを緩めながら、

「……しかし、その推測は穴が多い」

と、言つた。

「どこだい？」

と、口を尖らせて泪子は訊いた。

「……まず、犯人が見張つていたとは限らない。親しい人間で、美香さんと一緒に美香さんの家に向かつていたのかもしれない。それに、公園に逃げ込まずに、自宅へ走つたほうが安全だと思うが」

泪子は窓の外に視線を向けた。

「……否定するのは簡単だよ」

と、泪子は呟いた。

「……情報が足りないだけだよ」

と言つて、烏山はオーディオをいじつた。

起動音の後にスピーカーからピアノとウッドベースの音色が流れた。

車は走り出した。

「……これ、お葬式の帰りにもかけた曲だよね？」

と、泪子は烏山に訊いた。

「そうだ」

「なんて曲名なの？」

「そつちのドアポケットにケースがあるだろう？」

そう言つて、烏山は視線をチラッと泪子に向けた。

泪子はドアポケットをあさつて、1枚のCDケースを取り出した。

「これ？」

と、泪子は烏山に訊いた。
「それ」

と、烏山は答えた。
「何曲目？」

「2曲目」

泪子はドアガラスに身を寄せた。

ガラスから夜の街の明かりが入り込んだ。

「えつと…。」『ワルツ・フォー・デッビー』？」

と、英語で書かれたタイトルを泪子は読んだ。

「惜しいな。『ワルツ・フォー・デビー』」

と、烏山は言った。

「…『for』ってことは彼女に贈った曲？綺麗な曲だね」

「詳しくは知らない。明日香さんに借りたCDだから、明日香さんに訊いてくれ」

と、烏山はキャンディの棒を灰皿に押し込んで、言った。

「覚えてたらね」

と、泪子は言った。

会話は途切れ、車内には音楽が流れた。

泪子は携帯電話を開いて、ボタンを押すと、耳に当てた。

烏山はスピーカーの音量を下げた。

しばらく泪子は携帯電話をかけていたが、諦めた様子で携帯電話を閉じた。

「…出なかった」

と、泪子は烏山に言った。

「そうか」

と、烏山は応えた。

「誰に電話したのか、訊かないの？」

「…誰に電話したんだ？」

と、烏山は訊いた。

「お葬式で会った、美香ちゃんの友達。お葬式に来ていた人達、全員煙草を吸ってたから」

と、泪子は言った。

烏山は無言で、スピーカーの音量を戻した。

「…叔父さんに依頼したわけじゃないから、私、首を突っ込んでも構わないよね？」

と、泪子は膝に乗せていた帽子を被って、言った。

烏山はため息をついた。

「…あまり、無茶はすららろ」

「『するなよ』？」

「…するなよ」

第9章：おかしいの（前書き）

誤字がありましたので、訂正しました。

第9章：おかしいの

「叔父さん。おかしいの！」

と、受話器のスピーカーから泪子の声が言った。

烏山は、受話器と耳の距離をとってから、

「…なにがおかしいんだ？」

と、泪子に訊いた。

烏山は事務所のデスクに座り、クロスワードパズルをしていた手を休めた。

「私なりに、美香ちゃんの事件を調べたの。…といっても、ニュースとか新聞を見たり読んだりしたただけけど」

と、泪子は言った。

スピーカーからは泪子の声の他に、人々の喋る声などのキャンパス内の喧騒が届けられた。

「…それで？」

と、烏山はクロスワードパズルのタテの列を埋めながら言った。

『ねむりねこ』。

「それがね。ニュースとかでは、美香ちゃんが襲われたのは『アルバイトの帰りだった』って言ってるの。…でも、美香ちゃんはいつも昼頃からシフトをいれてたの」

「…なるほど」

と、言って烏山はクロスワードパズルのヨコの列を埋めた。

『ムーン』。

「おかしいと思わない？」

と、泪子の不機嫌な声が烏山に訊いた。

「…その日は用があつて、昼間は働けなかった。あるいは、彼女は他にアルバイトをしていた。そんなところだろう。別に不思議でも何でもない」

烏山はそう言うと、目を細めてクロスワードパズルを見つめた。

「…やっぱり、そんなところかな。無理やりすぎるか」
と、泪子が残念そうに言った。

「…無理に考えることはない。警察が調べてるんだからな。…話は変わるが、泪子」

「なに？」

「『南総里見八犬伝』に出てくる、刀の名前、分かるか？ひらがなで6文字だ」

「『南総里見八犬伝』って、江戸時代の？」

と、泪子が大きな声で訊いた。

「そうだ」

泪子は唸って、

「…分からないな。私、刀とか剣の名前で覚えてるのは、『エクスカリバー』と『草薙剣』^{くさなぎのつるぎ}、あとは『鬼神丸国重』^{きじんまるくにしげ} だけだから」

と、答えた。

「…そうか」

「なんで、そんなこと訊くの？」

と、泪子は訊いた。

「大したことじゃない。…今日はアルバイトか？」

と、烏山はデスクの引き出しに手をかけて、訊いた。

「うん。今日は5時から9時まで」

と、泪子は答えた。

「そうか」

引き出しから辞書を取り出して、烏山は言った。

「あ、そろそろ講義の時間だから切るね。また連絡する！」

そう言うつと、泪子は慌ただしく電話を切った。

烏山は受話器を置くと、瞳を閉じて、右手で眉間を押さえた。
左手の人差し指で辞書の背表紙を軽く叩いた。

デスクの電話が鳴った。

烏山は目を閉じたまま、左手で受話器を取った。

「…はい。烏山探偵事務所」

「儲かってるか？」

と、受話器の向こうから渋川警部補が訊いた。

「今月の家賃くらいは払えますよ」

と、烏山は答えた。

「そりゃあ結構だ。…姪っ子から何か聞いたか？」

と、渋川は尋ねた。

スピーカーからは渋川の声と共にクラクションの音や、車の排気音が聞こえた。

「…別になにも。残念ですが」

「そうか」

そう言っていると、渋川は欠伸をした。

「…そっちの景気はどうです？」

烏山は目を開けると、右手で辞書を掴んだ。

「前よりかは、いいな」

「何か分かったんですか？」

「無料じゃ、教えられないな」

と、渋川は間延びした声で言った。

烏山は辞書をもてあそびながら、

「…それじゃ、今度一杯奢りますよ」

と、言った。

「害者が持ってたバッグから、害者以外の人間の汗が採れた。まあ、微量だけだな。犯人ともみ合ったときにでもついたんだろう。」

「少なくとも、俺はそう考えてる」

と、渋川は言った。

烏山は目を細めた。

「…被害者は、アルバイトの帰りに被害にあっただけですね？」
と、烏山は辞書を睨みつけながら訊いた。

「コンビニエンス・ストアでアルバイトしていたらしい。いつも

は昼間働いてたらしいんだが、その日は急に働くことになったそう
だ」

と、渋川は騒音に負けないように大声で言った。

「急に？では、本来は働く予定じゃなかったんですか」

と、烏山は言った。

「仏さんになっちまった日の前日に決まったんだと」

渋川はそう言つと、一呼吸おいて、

「…おい、烏。本当は何か知ってるんじゃないのか？」

と、疑わしそうな声で訊いた。

烏山は辞書を引き出しに戻すと、

「…なにも。ただ、興味本意で訊いてみただけですよ」

と、言つた。

「…それならいいけどな」

と、渋川は低い声で言つた。

「…話は変わりますが、渋川さん。『南総里見八犬伝』に出てく
る刀の名前、分かりますか？ひらがなで6文字です」

「『南総里見八犬伝』？あの江戸時代のか？」

と、渋川は大きな声で訊いた。

「そうです」

渋川は唸つて、

「…知らないな。刀剣の名前で覚えてるのは、『虎徹』と『天叢雲
剣』、あとは『鬼神丸国重』だけだ」

と、答えた。

「…そうですか」

「どうして、そんなこと訊く？」

と、渋川は訊いた。

「大したことじゃないですよ」

と、烏山は答えた。

「…まあいい。何か分かったら連絡してくれ」

そう言つと、渋川は電話を切つた。

烏山は受話器をゆっくりと置いた。

烏山はデスクから立ち上がると、ソファに向い、ソファの上に放り投げてあった上着を取り上げた。

上着の内側を探り、皮の小物入れを取り出すと、烏山は上着を元の位置に戻して、デスクに戻った。

烏山は、小物入れから吸い殻の入っているビニールを取り出した。烏山はビニール袋をつまみ上げて、目線の高さに持っていった。

「…汗か」

烏山はビニール袋を見つめて、呟いた。

「…寂さん…」

窓ガラスの外から、明日香の声が烏山を呼んだ。

烏山はビニールを小物入れに戻すと、窓ガラスを開けた。

「寂さん！いま、暇？！」

烏山は明日香に視線を向けた。

店先から烏山を見上げる明日香は、霧吹きを振りながら、

「手伝ってくれない？！」

と、楽しそうに言った。

烏山は腕時計を見やった。

時計の針は2時47分をさしていた。

「…分かった。だが、今日は片付けまでは手伝えない。9時にはここを出たいんだ」

「十分！」

明日香は応えた。

烏山は窓ガラスを閉じた。

烏山はクロスワードパズルの雑誌を掴むと、ゆっくりと立ち上がった。

第10章：いいかな？

アルバイト先の事務所の中に入り、ドアを閉めると、泪子は小さくため息をついた。

泪子は制服のまま、事務所のデスクに近づいた。

泪子はデスクのパソコンをいじり、『タイムカード』と書かれたアイコンをクリックして、自分の登録番号を打ち込んだ。

モニターの『退勤』をクリックすると、泪子はデスクの上に置いてあった、シフトが書かれたファイルを取り上げた。

泪子は、ページをめくると指先をなめらかに動かした。

「…2時からか。いつもどうりか」

と、泪子は呟いた。

泪子はファイルを閉じたが、急に、思い出したような表情をしてファイルをひろげた。

泪子はページをめくり続け、美香の事件があった日のシフトが書かれたページで手を止めた。

泪子は美香の名前を見つけると、美香の入っていた時間帯を指でなぞった。

泪子はボールペンで書き込まれた文字を見つめて、

「20時から…24時。やっぱり、ここで働いた後か」
と呟いて、ファイルを閉じた。

泪子はファイルを置いてから、更衣室に入った。

泪子は制服から私服に着替え終わると、バッグを手にとった。
バッグの中からは携帯電話のバイブレータの作動している音もれていた。

泪子はバッグから携帯電話を取り出すと、ディスプレイに表示された名前を見てから、電話に出た。

「もしもし？」

「もしもし？ごめんね。昨日、電話出られなくて」

と、電話の向こうで高見舞^{タカミマイ}は言った。

「ううん。遅い時間に電話した、私が悪いよ。…ちょっと訊きたいことがあるんだけど」

と、泪子は言った。

「何？」

と、舞は聞き返した。

泪子は口を開きかけたが、すぐに困ったような顔をして、首筋に手をやった。

「…もしもし？どうしたの？」

と、舞が大きな声で訊いた。

「…忘れちゃった」

と、泪子は言った。

「忘れちゃった？何を？」

と、舞は驚いたような声で訊いた。

「煙草の銘柄」

と、泪子はアコーディオンカーテンを開きながら言った。

「煙草の何？聞こえなかった」

と、舞は訊いた。

「銘柄」

と、泪子は大きな声で、はっきりと言った。

「煙草の銘柄？何で、そんなこと訊くの？」

泪子は、吸い殻を見つけた経緯を簡単に説明した。

説明している間に泪子は、更衣室の荷物を置く棚を眺めた。

棚の上段には携帯電話やライター、煙草の箱が乱雑に置いてあった。

泪子は残念そうな表情で肩をすくめた。

「…なるほどね」

泪子の話を聞き終わると、舞は言った。

「つまり、美香の周りでその煙草を吸ってた人を探してるわけ？」
「そういうわけ」

と泪子は、舞の言葉に相づちを打った。

「それで、その煙草の名前を忘れちゃったと？」

「忘れちゃったの」

と、泪子は事務所の中を見回しながら言った。

「なんかーなんかーって、感じなんだけど…。覚えてただけ
どな」

「単語1つじゃないんだ？」

「うん。そうなんだ」

泪子はそう答えると、デスクに視線を止めた。

潰れた煙草の箱が、書類に半ば埋もれるようにして置いてあった。

泪子は書類をどかし、煙草の箱を取り上げた。

泪子は顔をほころばせると、

「あつた！」

と、大声を出した。

「…びつくりした。何？いきなり」

と、舞は笑いながら言った。

「思い出した！名前！『アンラッキー・ガーター』！」

「『アンラッキー・ガーター』？」

舞は低く唸ってから、

「…よくは覚えてないけど、確か、美香の昔の彼氏が吸ってたと思
う」

と、言った。

「本当？」

と、泪子は箱を元の位置に戻しながら言った。

「うる覚えだけどね。多分、そうだと思う」

「名前は？」

「…『トシユキ』。名字は知らないけど。確か、K大に通ってる
らしいよ」

「電話番号とか、分かる？」

「私は知らないけど、誰か知ってると思う。バンドの関係で知り合ったらしいから。明日、みんなに訊いてみる」

と、舞は言った。

「分かった。よろしくね」

そう言っ、涙子は電話を切った。

涙子は携帯電話をバッグに入れると、出入り口のドアに向かった。涙子がドアノブに手を伸ばすと、ドアが涙子に向かって開いた。

「なんだ、帰ってなかったの？」

と、榎野店長は驚いた顔をしている涙子に向かって言った。

「はい。ちょうど、いま帰ろうとしたところです。…お疲れ様でした」

「お疲れ様」

榎野は涙子に道をゆずって、言った。

涙子はレジにいた店員に挨拶しながら、小走りに店から出た。

烏山はコンビニエンス・ストアに入ると、店内を見回した。

店内には4人の客がいた。

4人の内、2人が雑誌を立ち読みしており、残りの2人はカップルのようで、仲良さそうにスナック菓子を選んでいた。

店員は2人で、1人はレジにいて、もう1人は紙パックのジュースの品出しをしていた。

烏山は店の奥の紙パックが並ぶ商品棚に近づいた。

長髪の店員は烏山の気配に気づくと、無言で少し脇によって、烏山に場所を譲った。

烏山は並んだ紙パックを眺めながら、

「…少し訊きたいことがあるんだけど、いいかな？」

と、若い店員に訊いた。

「はい？」

と、店員は疑わしそうな顔で烏山を見た。

「堂本美香さん、知ってるね。…私は、彼女のご両親に雇われた探偵だね」

「探偵？」

と、店員は興味がわいたように聞き返した。

「声大きい」

そう言つて、烏山は客の様子を確認した。

客は、烏山達に注意を払ってはいなかった。

「…ご両親は、生前の彼女の生活を知りたがっている。彼女に訊くことは、もう出来ないからね」

店員は納得したような顔で頷きながら、

「大変ですね」

と、言った。

「…どんな娘だったんだい？」

と、烏山は訊いた。

店員は紙パックを並べながら、

「いい娘でしたよ。かわいいし。…同じ時間に働くことは、あんまりなかったけど。彼女のほうが、入っている時間が早かったんで…でも」

と、店員は言葉を途切らせて、紙パックを並べる手を休めた。

烏山は店員を見た。

「…彼女が亡くなった日は、同じ時間帯だったな。訊いたら、急にシフトを入れられたって」

と、店員は言った。

「…そのシフトの表、見せてもらえるかな？」

と、烏山は訊いた。

店員は、疑わしそうな表情をした。

「それ、関係あるんですか？」

「…娘さんの最後の足取りだ。ご両親は知りたがると思う」

店員は神妙な面持ちで頷くと、

「ちょっと待っててください」

と言つて、事務所に向かった。

烏山は商品棚を眺めて、待った。

2分もしないうちに、店員が帰ってきた。

「お待たせしました。店長が中にいたから、遅くなっちゃって…」
そう言いながら、店員は周りを見回して、1枚のプリントを烏山に渡した。

烏山はプリントを眺めた。

プリントは18行あり、行の左端に名前が書かれていた。

その中には、泪子の名前もあった。

「…ここです。20時から24時の間」

店員はプリントを指差しながら、小声で言った。

「それで、俺はここ。20時から2時です」

店員は、『根元^{ネット}』と書かれた段を指差し言った。

その日、美香が働いていた時間に退勤した者、働いていた時間の前に退勤した者は、合わせて8人だった。

「…急にシフトが入ったって、聞いたんだね？」

と、烏山は訊いた。

「はい。前日の夕方くらいに、入ってくれて店長に言われた
って」

と、根元は言った。

「…そのわりには、店長さんは23時に退勤してるね？」

と、烏山は言った。

「ああ、何だか用があつたみたいですよ」

と、根元は答えた。

「…これ、コピーさせてもらってもいいかい？」

「いいんじゃないですか？過ぎたことですし」

と、根元は頭を掻きながら言った。

烏山はコピー機に向かい、コピーを取った。

烏山は原本のプリントを根元に返しながら、

「…助かったよ。これで、ご両親にいい報告ができる」と、礼を言った。

烏山は上着の内側から小物入れと、財布を取り出した。

烏山は小物入れからキャンディ、財布から1万円札を取り出して、根元に渡した。

「受け取ってくれ。ほんのお礼だ」

根元はキャンディを不思議そうに見ながら、受け取って、ズボンのポケットに入れた。

烏山はコピーしたプリントを折りたたみながら、店から出ていった。

根元は烏山の背中を見送ると、我にかえった顔をしてから、棚に並べる予定の商品が山積みのカートを、ゆっくりと見下ろした。

第11章：あなたが？

烏山はコンビニエンス・ストアから出ると、車に向かった。

駐車場が無いため、烏山はミニクーパーを店の前の路上に停めていた。

烏山はポケットから鍵を取り出して、車の鍵穴に差し込んだ。ガラスをノックする音が聞こえ、烏山は顔を上げた。

助手席側のドアガラスの外に、悪戯っぽく微笑んだ泪子がいた。

烏山はため息をつく、車に乗り込み、助手席側のドアのロックを外した。

泪子は背後の通りに目を配ると、素早くドアを開けて、シートに座った。

「…叔父さん。今、何時？」

と、泪子は訊いた。

烏山は腕時計を見やり、

「…9時42分」

と、言った。

「そうなんだ。…私、時計を忘れちゃったんだ。バイト先に。だから、取りに戻ってきたの。ちなみに私が働いてるのは、そこね」

と、泪子は烏山が出てきたコンビニエンス・ストアを指差して言った。

「…私のバイトが終わるのを待っててくれたわけじゃないよね？むしろ、私ที่บ้านに帰るのを待ってた。って感じだね」

と、泪子は首筋に手をやりながら言った。

烏山はシートに深く腰掛けると、瞳をゆっくりと閉じて、眉間を押さえた。

「まさか、叔父さんも調べてたなんてね。知らなかったよ。…しかも、私を避けてる、と見える」

そう言って、泪子は烏山を横目でチラリと見た。

烏山は何も言わなかった。

泪子は大袈裟に首を横に振ると、

「裏切られた気分だなあ。邪魔者扱いされるなんて」

と、声を大きくして言った。

「せっかく、新しい情報を仕入れたのに」

「…情報？」

と、烏山は聞き返した。

泪子はニヤリと微笑むと、

「知りたい？」

と、烏山に訊いた。

「…そうだな」

と、烏山は答えた。

「教えてあげてもいいけど」

と、泪子は言葉を切った。

「その前に。ごめんなさいは？」

烏山はため息をついた。

「…ごめんなさい」

泪子は満足げに頷いて、

「じゃあ、教えてあげよう」

と、言った。

泪子は、舞との会話の内容を烏山に説明した。

烏山は泪子の説明を聞き終わると、

「…その話は、いつしたんだ？」

と、泪子に訊いた。

「さつき。バイトが終わった後だから、9時10分くらいかな？」

電話の履歴を見ればすぐ分かるよ」

と、泪子はバッグを開きながら言った。

「いや、そこまで正確じゃなくていい」

と、烏山は泪子に言った。

泪子は、目を瞑っている烏山を見やった。

烏山は眉間を揉みながら、

「…確認するぞ。例の吸い殻を、事件現場の近くの空き家で見つけたことを、言ったんだな？」

と、訊いた。

「うん」

「事務所で、だな？」

「うん」

「事務所での会話つてもんは、店の中にも届くか？」

泪子は首筋を撫でながら、

「ドアの近くにいればね。多少は聞こえるよ」

と、答えた。

「そうか」

「…叔父さん？どうしたの？」

と、泪子は不思議そうに訊いた。

「あと1つだけ訊きたい。ここまで、堂本さんはどうやって通っていたんだ？」

と、烏山は眉間を揉んで訊いた。

泪子は、えっと、と言って、

「…電車。ここからなら、2駅離れてるだけだし」

と、言った。

烏山は目を開けた。

「…泪子」

と、烏山は泪子に語りかけた。

「忘れ物を取ってこい。それと、キャンディを5つ買ってきてくれないか」

泪子は無言で右手を差し出した。

烏山は、財布から千円札を出して、泪子に渡した。

「おつりは？」

と、泪子は訊いた。

「あげるよ」

と、烏山は言った。

「もらつよ」

そう言うと、泪子は車から出た。

泪子がコンビニエンス・ストアに入るのを見送ると、烏山は呟いた。

「…動くか？」

夜の住宅街を1台の自転車が走っていた。

自転車のハンドルを握る人物は、息を切らせて先を急いでいるようだった。

無灯火の自転車は、街灯に道を照らされて、入り組んだ住宅街を進んでいった。

突然、自転車に乗った人物はブレーキをかけた。

キキーツと、大きな音をたてて自転車は停車した。

その人物は自転車から降りると、呼吸を整え、右手にある建物を見やった。

その人物は自転車を押して、色あせた『For Rent』の看板が掲げられた空き家の敷地内に入っていた。

自転車のスタンドを立てると、その人物は小さな懐中電灯をズボンから取り出して、庭の一部を照らした。

懐中電灯の人工的な光が、むき出しの地面を動き回り、止まった。その人物は光の位置に近づくと、右手の近くにある塀を見やった。懐中電灯を持つ手がゆっくりと上がり、塀の隙間のある部分が浮かび上がった。

懐中電灯を持つ人物は、しゃがみ込んで光をウロウロと動かした。「…なるほど。自転車ですか。それなら、電車もタクシーも使わなくていい」

しゃがみ込んでいた人物は、声のしたほうを振り返った。

振り返った瞬間、声の方向から強い光がその人物を照らし出した。光に照らし出された人物は、短い唸り声を上げて、両目を押さえた。

「…堂本美香さんに関係している人物、1人1人に当たって思うと思っていたんですよ。運良く、あなたが最初だった」

と、烏山はキャンディをくわえて言った。

「…あなたが？」

と、烏山の陰に隠れて泪子は言った。

大きく細長い懐中電灯を持った烏山は、低い唸り声をあげている人物に近づいた。

「…確認に来なければよかったですよ。店長さん」と、烏山は言った。

樫野秀夫は両目を押さえて、

「あんた、誰だ？」

と、呻いた。

「烏山と申します。探偵をやってましてね」

と、烏山は言った。

「探偵？」

と、樫野は聞き返した。

烏山は泪子を振り返ると、

「離れている」

と、囁いた。

泪子は小さく頷いて、隠れていた位置にもどった。

「…この場所で煙草を吸っていた人物が、堂本さんが来るのを待っていたと仮定すると、重要なことは、『彼女に急なアルバイトの予定が入ったのを知っていること』です」

と、烏山は懐中電灯の明かりを消して語り出した。

「彼女がシフトを入れたのは事件の前日、いや正確には前々日ですね。これにより、容疑者の数は減ります。次に、犯人は煙草

を嗜む人間であるということ。好む銘柄も分かっている。これで、また数が少なくなる」

そう言って、烏山はキャンディを口から出した。

「そして、今日ここに来たということは、おそらく泪子の会話の内容を聞いた人物。今日あの店にいて、事件当日、堂本さんが帰宅した時に、あの店にいなかった人物」

烏山はキャンディを口に戻した。

「…あなたに1つ、お願いがあります。店長さん」

榎野の懐中電灯は、明かりがついたまま、榎野の足元に転がっていた。

「…お願い？」

と、榎野は目をこすりながら訊いた。

「あなたの煙草の吸い殻をいただきたい。この場所で拾った吸い殻と、比較したいので」

榎野は、目が慣れた様子で、烏山を睨みつけながら、

「…いま、その吸い殻を持ってるのか？」

と、訊いた。

烏山は懐中電灯を脇に挟み、自由になった手を上着の内側に突っ込んだ。

不意に、しゃがみ込んでいた榎野が、烏山に向かって突っ込んだ。下方からのタツクルだった。

烏山は1歩下がって、タツクルの威力を殺すと、内ポケットに入っていた左手を抜き出した。

烏山の脇から懐中電灯が落ちた。

烏山は、姿勢の崩れた榎野の頭を左手で押さえた。

烏山は腰を落とすと、榎野がしがみついた腰を素早くひねり、右膝を榎野の脇腹に食い込ませた。

榎野は悲痛な声をあげて、顔を歪めた。

烏山は掴んでいた頭を突き放し、榎野を振りほどいた。

烏山は2・3歩後ずさると、右脚を胸元まで引きつけ、榎野の顔

面に向かって足刀蹴りを蹴り込んだ。

まともに足刀蹴りを受けた榎野は、ゆっくりと仰向けに倒れた。

烏山は深く息を吐くと、右脚を地面に降ろした。

烏山はキャンディを口から出した。

烏山は榎野に近づき、転がっていた榎野の懐中電灯で、榎野の顔を照らした。

気を失った榎野の鼻は赤くなっており、鼻の下には泥がついていた。

烏山は懐中電灯を消すと、地面に転がした。

離れていた泪子が、烏山におずおずと近づいた。

烏山は上着の内側から携帯電話を取り出すと、電話をかけた。

数秒の後、渋川警部補が電話に出た。

「…烏山です。女子大生殺しの件で、提きよりらいます」

烏山は言葉を途切り、咳払いをした。

「女子大生殺しの件で提供したいものが。1つは、じげれんばぶりん…」

烏山は言葉を切ると、眉間にしわを寄せて、キャンディを見つめた。

「1つは事件現場付近で見つけた煙草のすりらん…」

泪子は烏山の肩を叩た。

烏山は泪子を見た。

「…叔父さん、電話貸して。私が伝えてあげるから」と、泪子は右手を差し出して言った。

エピソード

「まあ、要するに。店長は美香ちゃんに言い寄ってたんです。元々、『タッチ』は多かったし」

と、泪子は小さなサボテンを見つめて言った。

「泪ちゃんも『タッチ』の被害者？」

と、明日香は切り花の手入れをしながら訊いた。

「そうですね」

「やっぱりね」

日曜日、午後の穏やかな日差しが『Ip anema』の店先に届いていた。

泪子はコートを腕に引っかけて、観葉植物の並ぶ棚の前にしゃがみ込んでいた。

明日香は花々の間をゆつくりと行き来していた。

「それで、あの晩。美香ちゃんをつけたのはいいけど、途中でバレちゃったらしいんです。公園で美香ちゃんに問い詰められて、もみ合いになって……」

泪子は言葉を切った。

明日香は泪子をチラッと見やって、

「そういえば！泪ちゃんの友達のストーカー事件はどうなったの？」

と、話題を変えるように訊いた。

泪子は観葉植物の脇に置いてある、庭の飾り付け用の小人の置物を手に取った。

「……信じられない話ですけど、付き合うことにしたらいいです」

「嘘？」

と、明日香はカウンターに手を置いて言った。

「本当です。見た目が悪くないことと、年齢が『守備範囲』だからって」

と、小人の鼻をつつきながら泪子は言った。

「ふうん。人間、色々ね」

と、明日香は肩にかかった髪を払いながら言った。

店の奥のドアが開き、烏山がダンボールを抱えて現れた。

「あ、寂さん。その箱は出さなくていいわ。戻ってきて？」

と、明日香は烏山の抱えたダンボール箱を見て言った。

烏山は返事をする代わりに、口から出ていたキャンディの棒を上下に動かした。

烏山が奥に引つ込むと、泪子は、

「…明日香さん。私、もう少ししたら、今のバイト辞めようと思ってるんです」

と、明日香に言った。

「そうなの？」

と、明日香はカウンターの下をあさる手を休めて訊いた。

「そうなんです。元々、家から近いってだけで選んだだけだし」

と、泪子は立ち上がった言った。

泪子は置物を持ったまま、明日香のいるカウンターに近づいた。

「じゃあ、次のアルバイト先、見つけなくちゃね」

と、明日香は腕組みをして言った。

「そうなんです。見つけなきゃいけないんです」

と、泪子は小人の帽子を被った部分を撫でながら言った。

明日香は悪戯っぽく微笑んで、

「私、いい所知ってるわ。紹介してあげようか？」

と、軽く首を傾げて提案した。

泪子も明日香と同じように微笑むと、

「ぜひ」

と、言った。

カウンターの後ろのドアから、烏山が手ぶらで現れた。

「寂さん。今の話、聞こえてたよね？ドア、少し開いてたもんね？」

と、明日香は烏山に言った。

烏山はため息をつく、と、泪子に向かい、

「…まず、明治さんに許可をもらってからしろ」

と、言った。

泪子は、大きな瞳を楽しそうに細めると、

「…もう許可はとつてあるよ。お父さんも、そのほうが安心できるって」

と、烏山に言った。

烏山はキャンディを噛み砕き、

「…用意がいいな」

と、呟いた。

明日香は泪子の頭を撫でながら、

「こんなに可愛い娘だもの。身内に預けておけば安心できるってことよ」

と、言った。

「ねえ、雇ってあげなさいよ。寂さん？」

と、明日香は烏山に視線を移して言った。

泪子は烏山を見つめた。

烏山は明日香達の視線を避けるように、天井を見つめた。

「…給料はよくないぞ」

と、烏山はため息混じりに言った。

明日香は烏山の肩を叩くと、

「決まりね。泪ちゃん、おめでとう！」

泪子を見て言った。

「ありがとうございます！」

と、泪子は置物を持ったままで言った。

「さて、アルバイト先も決まったし。今のアルバイトなんか、さつさと辞めてしまいなさい！」

と、明日香は楽しそうに言った。

「はい。さつさと辞めてしまいます！」

と、泪子は弾んだ声で応えた。

「…あの」

と、店先から控え目な声が店内に届いた。

「あ、いらつしゃいませ」

と、明日香がカウンターから離れながら言った。

スーツ姿の50代半ばくらいの男は、キョロキョロと店内を見回して、

「あの、この上にある探偵事務所に用があつたのですが…。ドアに『ご用のかたは下の花屋にどうぞ』と、貼り紙がしてあつたものですから」

と、不安げな声で言った。

烏山はゆっくりと歩み出た。

「私が上の事務所の所長、烏山です。ご依頼ですか？」

「はあ」

男は、エプロン姿の烏山を眺め回して答えた。

烏山は男と一緒に、『Ipinema』から出ていった。

明日香は店の中を振り返った。

店内では、泪子が真剣な顔つきで小人を抱え、カウンターに寄りかかっていた。

「どうかしたの？」

と、明日香が泪子に訊いた。

「…私、明日香さんに訊きたいことがあつたんですけど、忘れちゃって」

と、泪子は言った。

「訊きたいこと？」

と、明日香は首を傾げて訊いた。

泪子は置物をカウンターの上に置き、首筋に片手をやった。

泪子は両目を閉じて、小さく唸った。

「あ！そつだ」

と、目を開けて泪子は大声を出した。

明日香は、身体をビクツと動かした。

「曲です。ワルツ・フォー・なんとかって名前の。叔父さんに、明日香さんが貸したってCDの中の曲です」

明日香は腕を組んで、小首を傾げた。

「…もしかして、『ワルツ・フォー・デビー』のこと？」

と、明日香は泪子に訊いた。

「そう！それです！」

と、泪子は店先の明日香に近づいて言った。

「気に入った？」

と、明日香は訊いた。

泪子は頷いた。

明日香は微笑んで、

「あの曲はね、あるジャズ・ピアニストが自分の姪のために作った曲なの。だから、デビーっていうのは姪の名前ね」

と、言った。

「姪の名前？」

と、泪子は聞き返した。

「姪の名前」

と、明日香は繰り返した。

烏山探偵事務所の窓が開き、烏山が顔を出した。

泪子達は2階を見上げた。

「…泪子。まだ契約前だが、お茶でも淹れてくれないか」

と、烏山は言った。

泪子は微笑むと、

「了解しました！所長殿！」

と、大きな声で応えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8302d/>

烏

2010年10月9日07時13分発行